



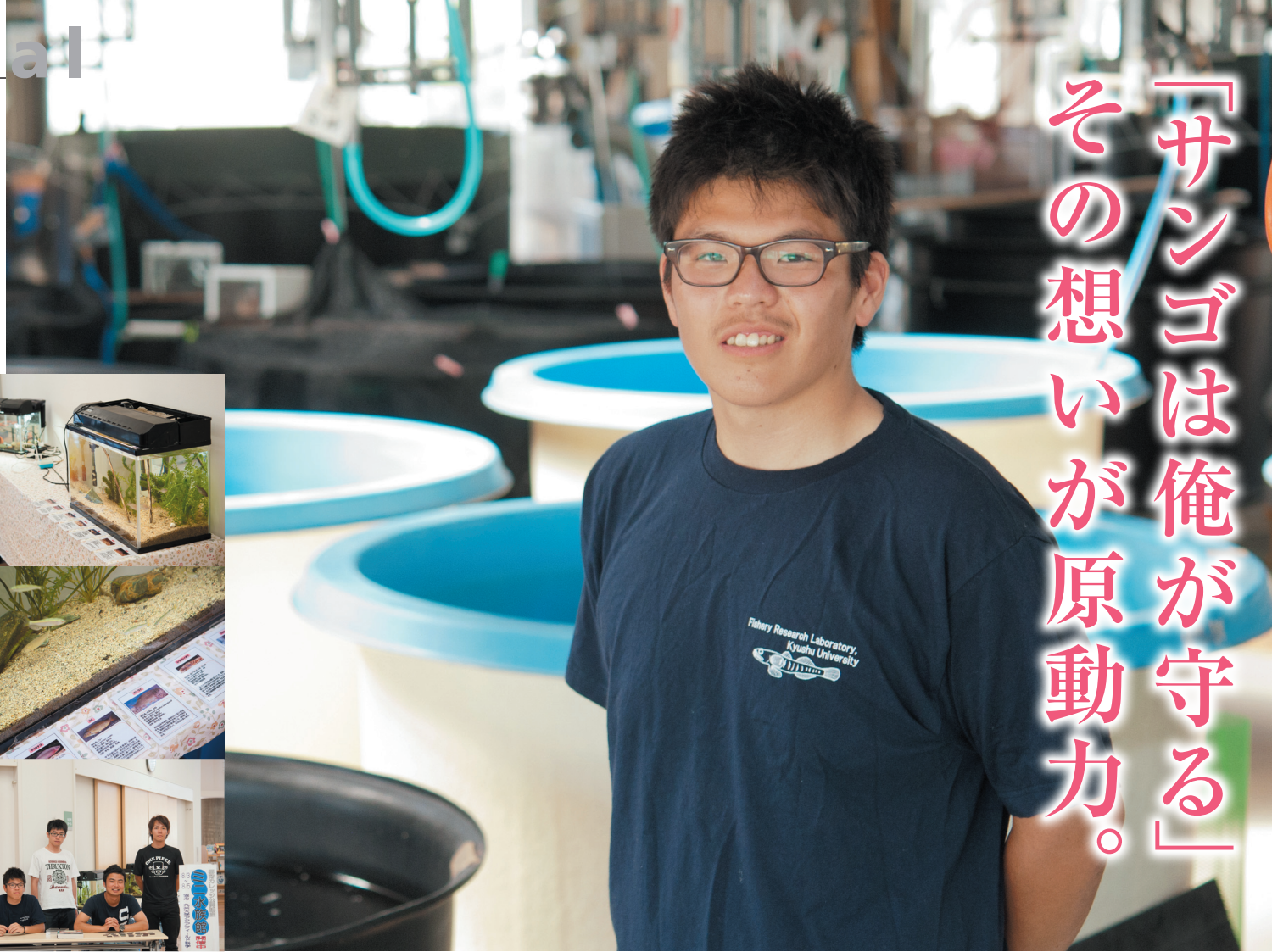
生物資源環境科学府 修士課程1年

Fumito Ishino

石野 史人さん

九州大学で学び、
目指す分野を究めようとする
次世代のプロフェッショナルを
紹介します。
今回は、イソギンチャクを使って、
サンゴの白化現象の研究に
取り組んでいる
若き研究者にお話を伺います。

「サンゴは俺が守る」
その想いが原動力。



担当教授より



農学研究院

よくに みちやす

吉国 通庸 教授

新しい領域へチャレンジする
彼の意欲に期待しています。

種類が多いなどの理由で、同じ
土壌で議論にくい動物は、「モ
デル動物」を作ることがありま
す。同じモデルを使ってそれぞ
れの考えを議論することで、研
究が一気に進むからです。そう
いったモデル動物の社会的意義
を、石野くんはしっかり理解し
て研究できていると思います。
感心するのは彼の積極性。研究
に必要なと思ったら、物怖じせ
ず、誰にでも聞きに行っていま
すよ。それから、材料をよく観
察しています。これが一番大事

なことなんです。昨日と今日の
ちょっとした違いが、大きな発
見につながることもありますか
ら。先行研究で苦労も多いと思
うのですが、彼は自分で調べた
ことから仮説を立てて、こんな
実験をしたらどうかと実験内容
まで考えて僕の所にやってきま
す。修士1年生でここまででき
る学生はなかなかいません。彼
の研究テーマはまだ新しい領域
なので、初めてのことが見つか
る可能性も大きい。今後も彼の
研究意欲に期待しています。

石野 史人さん DATA

私立上宮高等学校
九州大学 農学部
九州大学 生物資源環境科学府
修士課程



memo

研究は社会に還元すべきだと考える石
野さんは、地域の社会活動にも積極的
です。夏休みには研究室のメンバーと
ともに、出張ミニ水族館を実施。福津
市にある宮司コミュニティセンターで、
淡水魚類の展示を行い、訪れた小学生
たちと交流を深められていました。

九州大学の関連 WEB サイトへ

九州大学 生物資源

Go

<http://www.agr.kyushu-u.ac.jp>

地球環境の変化により、
危機的な状況にあるサンゴ。



沖縄県宮古島の元気なサンゴたち
(2010年、フィールド観察会時に撮影)

サンゴは、海の中で花を咲かせて
いるように見えますが、植物ではな
くて動物です。そのサンゴですが、
近年の地球環境の変化により、白化
現象が発生し、世界中で問題になっ
ています。

白化現象とは、サンゴの細胞の中
で共生している褐虫藻^{かつちゅうそう}が、何らかの
要因で抜け出し、サンゴが白くなっ
てしまう現象のこと。サンゴは、植
物である褐虫藻が、光合成をして得
た栄養をもらって生きています。で
すから、褐虫藻が抜け出すと、サン
ゴが白く変色するだけでなく、栄養
がとれなくなつて死滅してしまうので
す。今回ご紹介する石野さんの研究に
は、この白化現象が大きく関わっています。

太平洋のイソギンチャクで、
サンゴのモデル動物を作ろう。

サンゴの褐虫藻への依存度は高く、
70%とも言われています。そのため、
健康な時と白化の状態を比較してそ
の原因を探ろうとしても、白化の状
態を維持できず実験がむずかしい状
況にありました。そこで石野さんは、
サンゴの生態に近い「モデル動物」
を使って、サンゴの研究を進めよう
と考えます。そのモデル動物に選ん
だのが、サンゴと同じ褐虫藻と共生
するイソギンチャクでした。

「実は、既に欧米の方では、大西洋
に生息するイソギンチャクを使って
研究が始まりつつありました。でも、
太平洋に生息するイソギンチャクを
使った研究は、全く進んでいません
でした。太平洋は、大西洋よりもサ
ンゴの種類が多く、生息域も広い。
ですから、太平洋に生息するイソギ
ンチャクをモデル動物にした研究は、
今後のサンゴ研究において大きな意
義を持つと思っています」

中学生の時、白化したサンゴを
見て大きな衝撃を受ける。

石野さんがサンゴに興味を持った

だまです。研究の途中でつまづい
ても、自分で考えるしかないので大
変ですが、毎日、新しい発見があつ
て楽しいですよ」

いろんなことを見ていれば、
きっと何かに出会ふはず。

「これから大学で学ぶ人たちには、
自分のやりたいことを見つけてほし
いですね。いろんなことを経験する
なかで、きっと何かに出会ふはずで
す」と石野さん。彼のサンゴへの意
欲と情熱は、周囲の人たちの心をも
動かす力があるように思えます。ぜひ、
イソギンチャクを使った研究で成果
をあげ、美しいサンゴの保護に貢献
してほしいものです。